

大分市移住者居住支援事業について

大分県外から大分市内へ転入する理由が転勤、出向等職務上のもの等でない、自己の意思による移住をした場合に、住宅の取得費用等の一部を支援するものです。



主な要件

- 申請時点において、世帯構成員の半数以上が移住をした日から起算して1年を経過していないこと。
- 定住(5年以上)する意思があること。

補助額(最大の場合の金額)

区分	新築	購入(改修)	賃貸
仲介手数料	-	5万円	5万円
建築費・購入費	100万円	100万円	-
引越し費用	20万円		
奨励金	10万円		30万円

例：空き家を購入して大分市に移住した場合、最大135万円の補助を受け取ることができます。

その他

- 予算の範囲内で先着順。事前相談が必要です。詳しくは、市ホームページをご覧ください。住宅課へお問い合わせください。※賃貸の補助は大分市住み替え情報バンクの登録物件が対象です。(一部例外あり)

住宅課 ☎ 585-6012

おおいた産業人財センターについて

「おおいた産業人財センター」では、大分県内へのUターンを希望する方の“大分での就職”を支援しています。県外の学校に通われている学生や県外にお住まいのお子様を持つご家族の方はぜひ、おおいた産業人財センターにご相談ください。センターに利用登録することで、大分市Uターン相談員が就職に関するさまざまな相談に応じ、企業情報や求人情報を提供いたします。(無料)

ホームページはこちら▶



おおいた産業人財センター ☎ 533-2631

大分市移住応援サイト

大分市の生活環境、子育て支援、高齢者支援、起業、農業・林業・漁業についての情報やおおいたの食や観光情報に加え、東京・大阪・福岡などで開催される移住相談会の開催情報などを紹介するホームページです。ホームページはこちら▶



おおいた魅力発信局 ☎ 578-7749

担当者から

これまで移住されてきた人から、「都会的な利便性を持ちつつ、海・山・川などの豊かな自然環境がある」「就職先が見つけやすい」「子育て環境が充実している」など、大分市の魅力を沢山お聞きしてきました。これを裏付けるように、宝島社『田舎暮らしの本』2月号、「2021年版住みたい田舎ベストランキング」で上位に選ばれるなど、移住先として全国から注目され始めています。また本市は、地元出身者の帰郷(Uターン)も多い傾向にあります。この機会に、遠く離れて暮らすあなたの家族や大切な人と、近くで生活することを検討してみませんか。私たちが全力で移住をサポートいたします。



左から住宅課 加藤
おおいた魅力発信局 上原、光永

大分市の移住支援施策をご紹介します！

※令和2年度の施策です

移住者や地域の人々が仲良く集う場所を目指して。

大分市の魅力や生活に必要な情報を発信していきたい

2人の息子さんを育て、人生の大半を大阪で過ごしてきた瑞木さん夫妻。出身地とはいえ、大分に戻ってくることに不安はなかったのかとの問いに「やっぱり私たちが大分の人間だということですよ。」



壁に掛けられた飾りは知り合いの作家が作ってくれたもの。モチーフになっているのは3人のお孫さん。



移住する際「一番大変だったのは荷物の仕分け」と声をそろえる2人。

昨年10月、府内町のビルの一角に瑞木さん夫妻が営むカフェがオープンしました。オーナーの瑞木久美子さん(67歳)、康孝さん(67歳)夫妻は大分上野丘高校の同級生。大阪を中心に県外で暮らしたのち、48年ぶりに帰郷。念願だったカフェを営みながらの大分生活をスタートさせました。白を基調とした明るい店内は、地域の人々や友人をはじめ大分市に移住してきた人々も集うコミュニケーションの場となっているようです。



瑞木康孝さんと久美子さん夫妻の、柔らかな雰囲気そのまま映し出したような、まちなかの癒し空間。

実際に移住された人の声も聞いてみた！

長く住んだということではなく、大分に愛着を持ち続けているからこそ、帰ってきたいと思っただけです。と久美子さん。この場所で生まれ育った康孝さんにとっても、商店街は子どもの頃の記憶が詰まった場所。賑やかだった「若松通り」の時代から徐々に活気がなくなっていく様子に寂しさを感じることもあったそうですが、近年はイベントも多数開催され、若者がたくさん訪れる街へと再生していく過程が楽しみに。「私たちも、何か地元に貢献したいという気持ちがありました。」

一家で過ごした思い出の地、アメリカ北東部ニューイングランド地方発祥の「クラムチャウダー」を看板メニューに、こだわりのコーヒーやホットサンド、スイーツを味わいながらのんびりと過ごすことができる雰囲気は、特に同世代に好評のよう。

「お店を始めたことで、大分を気に入り移住する人が多いことを知りました。もっと大分を好きになってもらうためにも、街の情報をたくさん集めて、発信していきたいですね。」